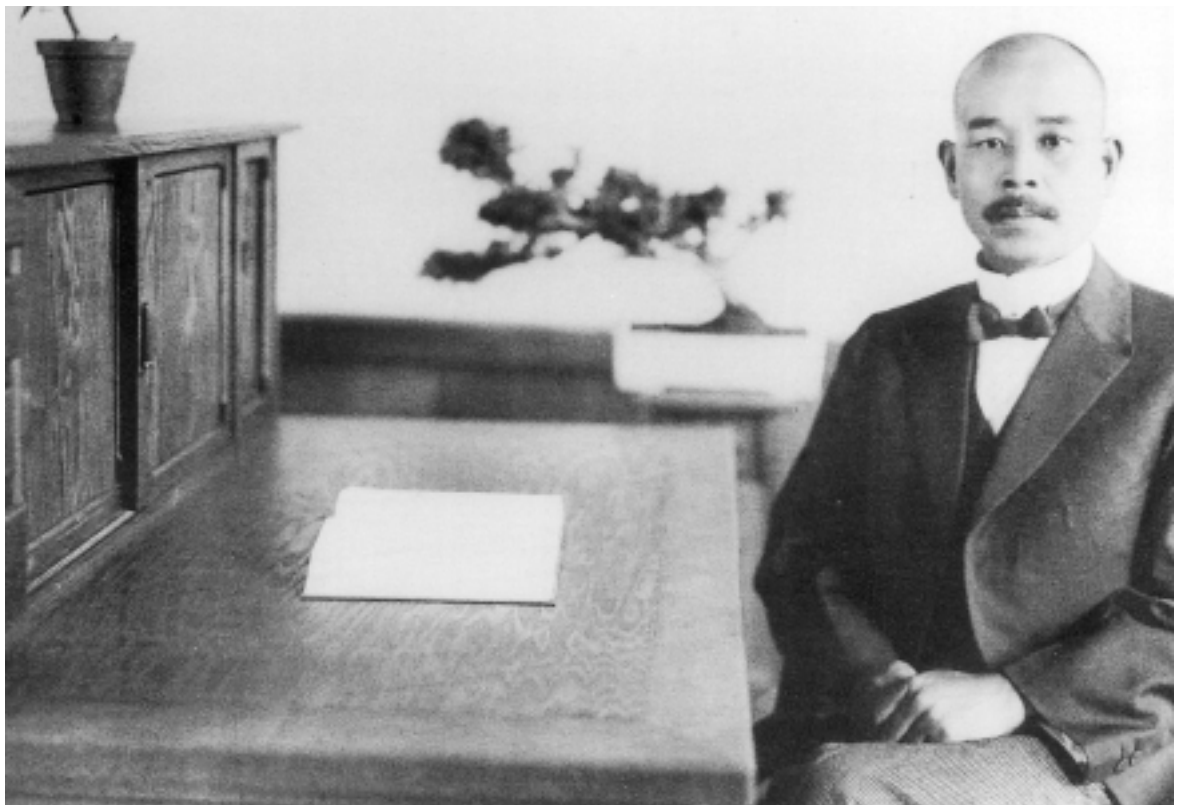
磐高 尾崎楠馬先生 50回忌 特別号

平成15年10月10日
静岡県立磐田南高等学校
尾崎楠馬先生50回忌法要
実行委員会

印刷　総合印刷　㈱大進堂

初代校長 尾崎楠馬先生をしのぶ



尾崎楠馬校長先生　開校式に配布された記念写真帖から転写

ドカ中精神は建学のこころ

大正十一年、当時の名門校中泉農学校の道場を借りて入学式を済ませ、旧見付学校を仮校舎としてスタートした県立見付中学校の前途は多難なものであった。しかし初代校長として浜松師範学校教頭から赴任した尾崎楠馬校長は高知県出身、そして校長の三顧の礼に感動して教頭を引き受けた小田原勇教頭は鹿児島県出身。静岡県とは風土の違った土地に育った硬骨の教師コンビが誕生したことになる。二人は、青年教師時代に茨城県土浦中学校で苦楽を共にし心通じた仲であった。

小田原教頭は「大学予科や専門学校への進学ばかりに熱中して、人の魂を養うことを忘れているような教育では駄目だ。心と身体を鍛える教育をすべきだ。」と尾崎校長に進言し、意気投合した二人の教育が始まった。

何もない磐田原の野原に立って、二人は零からの出発、真の人間教育をしようと心に誓ったことであろう。

一学期が終わった七月、「自分のものは自分で運べ」と言われ、生徒は自分の机と椅子を担いで、旧見付学校の仮校舎から校舎のみの見付中学校へ移った。

「学園を自分たちでつくろう」の合言葉の下に、校長、教頭が先頭に立って、毎日の放課後は一～二時間鍬を握り、モッコ担ぎや草むしりで運動場づくりが始まった。そしてその後、石ころ交じりの運動場でクラブ活動に励んだ。まさに「ドカ中」のスタートであった。二人が目指したものは、勤労・鍛練の労作教育を通した人間教育であった。そして先生も生徒も一緒に汗を流して一つのことを成し遂げる師弟同行の下に、生徒も学校づくりに燃えたことであろう。

校則も厳しかったという。手袋、オーバーの使用禁止、登校したらコンクリートの上でも靴下の着用禁止、ポケットに手を入れてはならない等々であったという。

そして労作教育は校庭の拡張工事と防風堤づくりへと進んでいった。磐田原の野原を切り拓いた運動場の砂埃を防ぐために、小田原教頭の提言によって、幅十四、五ｍ、高さ六ｍ、延長一七〇ｍの大堤防づくりが始まった。父母の非難の声を一身に受けながらも先頭に立って生徒を引っ張り、ついにこの難事業を成し遂げた。これを成し遂げた生徒たちの胸中には、困難なしごとも立ち向かえば不可能を可能にすることができるという強い信念を植え付けられたことであろう。近年この頃の教え子たちを中心にした人達によって、小田原山と呼ばれるようになった防風堤の最高部に小田原教頭の顕彰碑が建てられた。

尾崎校長・小田原教頭 真の人間教育を目指す

労作教育はさらに続いた。一回生が最上級に進んだ大正十五年八月、中泉農学校と同じ様に生徒と教師の合作による五十ｍプールが完成する。小田原教頭はこの機を逃さず水泳部づくりに乗り出す。

尾崎・小田原コンビの「質実剛健」の鍛練教育の具体化はまだまだ各所に見られる。毎週土曜日の午後は加茂川、高町、中泉、八幡宮の五〇〇〇ｍコースのマラソンを全校で実施したし、夕方出発して早朝帰校する夜間遠足もよくやった。そして小田原教頭が全校生徒を泳げるようにした特訓は後々まで語り継がれた。それは、天竜川の河口で、船の上から生徒を次々と突き落とし、泳がざるを得ない極限に生徒を追い詰めたことである。今ならすぐ問題にする人がいるのではなかろうか。賛否は分かれるにしても、人間を鍛えることによって真の人間性を培おうというこの精神は、見付中学の教育として脈々とつながっている。

人間性を培うという理念は、ただがむしゃらに鍛えればよいというだけではなかった。心を育てるには、綺麗な教育環境が必要だと校舎を磨くことにも専念した。掃除は徹底してやった。美術の丹羽先生は情操陶冶の場を造ろうと、生徒にも手伝わせて県道から正面玄関に上がって行く左側に素晴らしい庭園を作り上げた。

校内の整備が整ってきた大正十五年十一月六日待望の開校式が挙行された。式には知事以下多数の人々が参加した。校庭には雑草一本、塵一つ無く、素晴らしい花壇、緑の芝生、ピカピカに磨かれた廊下、キビキビと礼儀正しい生徒たちを見て、地元出身の柴田善三郎愛知県知事は「今まで私は日本国中をあちこち歩き、数多くの中学校を参観してきたが、これ程見事な教育成果を上げている学校は見たことがない。尾崎校長、小田原教頭以下職員、生徒が一致しての教育の可能性の高まりを見て、これ以上の感激はない。」という趣旨の挨拶をしている。

そして土方仕事ばかりやらせて勉強をやっているのかという批判が目立つ見中から、次々と優秀な上級学校へ進学する生徒が出るに及んで、尾崎・小田原コンビの教育方針に傾注する者が増えていった。

見付中学の礎を築いた小田原教頭は、昭和三年十二月二十四日請われて榛原中学（現榛原高校）の校長として赴任し、荒廃していた学校を全国のモデル校と言われるまでに育て上げた。退職後も人間教育の理想を目指して自ら「培本塾」を創設し、人間教育一筋の人生を全うした。

尾崎校長は大正十二年二月十日から昭和十七年三月三十一日という長きにわたる校長職を全うし、そのまま見付に住み着き、教え子や地域に影響を与え続けたが、病に倒れ、昭和二十九年に七十七歳でこの世を去った。

（以上の文は「磐田人物往来」から転載した。作者は寺田伊勢男氏）

50回忌の栞（中19回鈴木直之さん作成）。
上の尾崎先生の写真、左の文（作者は、高9回寺田伊勢男さん）は栞より転載

追悼の辞を述べる中3回山内克巳さん

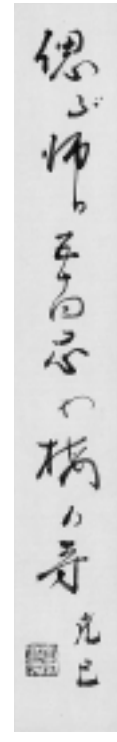
50回忌法要盛大に

2月2日(日)　見性寺にて

梅の花が咲き始めた見性寺の本堂は、いまだ寒くストーブの暖をとりながら、尾崎楠馬先生50回忌法要が、厳粛に執り行われました。

祭壇に安置された先生の位牌にむかって、発起人代表の山内克巳さんが追悼の辞を述べました。そして、住職の読経に合わせて、先生の徳を慕って集まった教え子と縁者70名余が榛を正して合掌し、香を焚き、先生のご冥福を祈りました。

続いて、先生を偲んでの想い出などが披露され、それから墓前に移り、再度先生のご冥福を祈りました。



尾崎楠馬先生年譜

（遺稿集より抜粋）

初め桜洋、後に桜汀と号する。蓋し郷里桜浜の名に因む。

明治11年（1歳）
10月1日高知県安芸郡赤野村桜浜76番屋敷において、父尾崎徳次郎、母楠の長男として生まれる

明治13年（3歳）
弟出生のため、安芸郡安芸町本町なる母の実家船本家に預けられる。当主は叔父楠吉、祖母健在にてその養育を受ける

明治17年（7歳）
1月（満5歳3か月）安芸町安芸小学校に入学

明治20年（10歳）
9月高知県尋常師範学校付属小学校に転校
明治18年より25年3月まで叔父船本楠吉、高知県立高知尋常中学校（後の県立高知城東中学校）に奉職中にて、この年よりその膝下に移る。安芸町の祖母のもとに在った間は毎晩その肩を叩き、祖母は地唄等を聞かせて労をねぎらったという

明治24年（14歳）
9月高知尋常中学校に入学

明治25年（15歳）
3月叔父郷里に奉職するに及び、同校を退学して安芸町に帰る
9月安芸町芸陽高等小学校第4学年に編入

明治27年（17歳）
5月安芸郡役所給仕を拝命

明治28年（18歳）
10月1日高知県立簡易農学校水産撰科に入学

明治29年（19歳）
4月8日に高知県師範学校に入学

明治31年（21歳）
9月水泳術練習50町長渡りを修了

明治33年（23歳）
3月31日高知県師範学校本科を卒業
4月13日安芸郡芸陽高等小学校訓導を拝命
6月1日現役兵として歩兵第44聯隊に入営

明治34年（24歳）
10月高知県立第一中学校助教諭心得兼務、分校勤務を命ぜられる

明治36年（26歳）
4月8日東京高等師範学校に入学

明治37年（27歳）
10月27日次弟駒之助、勤務先の大阪にて病を得、帰郷療養中没する、享年25歳。落胆甚だし

明治38年（28歳）
8月19日3歳より養育を受けた船本祖母84歳にて病没

明治40年（30歳）
3月31日東京高等師範学校本科国語漢文部を卒業

尾崎楠馬先生は、心の

尾崎校長の遺徳の大きさ改めて実感

祭壇には、同窓会と後援会の生花、学校長とPTA会長の盛籠が供えられた

想い出の一事件

発起人代表
中3回　山内克巳

尾崎先生頌徳之碑の銘に「資性謹厳重厚識見高邁ニシテ人格皎潔」とあるが、まさにその通り。在学中はその真髄を学び得なかったが、むしろ卒業後、水泳部の指導をしていた一人であったことから先生に接することが多かった。

その中の一事件を述べる。杉浦重雄という有望選手が4年生の春、仲間と芸者遊びをしたことがばれ、即時退学と決定。何しろ映画館に入っても見付かれば停学という時代。水泳部長が心配顔で知らせてきた。私は、彼が居なければ水泳部は衰退してしまうと思い、必死な覚悟で校長室にとびこんだ。「どうか杉浦の退校は思い留まって下さい。彼は水泳が生甲斐です。もし彼をそのまま退校させればまた不良少年になってしまいます。学校はこういう素行の悪い者を善導するのが使命ではないでしょうか」

校長は、大きな目をギョロリと私を見つめた。「若し許されるなら私が責任を持って彼を家に引き取り監督します。どうぞお願いします」先生黙然。しかし、翌日の職員会議で死一等を減じ三ヶ月の停学で済んだ。私は校長の決断に涙を流した。

彼は、後に早大に進み、オリンピックで見事金メダル。日本の優勝に貢献したのである。

後に、校長は私の結婚式に遠路わざわざ出席され、私の母に「長い間杉浦の面倒有り難う」と言われた。

尾崎楠馬校長を憶う

同窓会関東支部長
高2回　高田岩男

かつては、元日の早朝毎年のように、見付の天神様と総社の間のどこかで、先生と行き合い挨拶したものであった。いつも和服の着流し姿で、腕組みしながら、下駄履きのまま歩いて居られた。私は昭和19年4月の入学なので、教室で親しく授業を受ける機会はなかったが、入学式・卒業式の都度、来賓としてお出で下さった先生が、即興で作られた漢詩をご披露されるのには、畏敬の念を禁じえなかった。

同窓生ら約70名が参列

私も先生が卒業された東京高等師範・文理科大学の新制東京教育大学に進んだ。ある教授から「出身校は」と尋ねられて、「見付中学です」と答えたところ、「あそこには尾崎楠馬という校長がいたでしょう」、「簡野道明の書いたものに『畏友尾崎楠馬君』と出てくる。よほど偉い人なんですね。今どうして居られますか」と聞かれて、先生の名が、天下に轟いていることを知った。

私のいとこは見中第1回卒業生で、兄は18回卒、姉のつれあいが12回卒等々、親戚には尾崎校長を知る者が幾人も居て、そのお人柄については、早くから耳にしていた。大学の後輩となってご挨拶に伺ったこともある。そして奉職。都立高校の校長として、教育のいろいろな場面に遭遇した時、いつも思い出されたのは、尾崎校長の風貌と言動であった。「先生ならどうなさいますか」と、心のなかで問うていた。

勤労による人間性陶冶の哲学は、今も私のなかに生きている。

遠路ご来席の高田岩男さん（左）

ご芳志払込取扱票　通信欄より

●法要に参列いたし度いが高齢のため出席できません。よろしくお願いいたします。　中1回　岩波重三

●高知訪問も参加したいが、老人で行けず残念です。　中7回　伊藤覚司

●尾崎先生が入院の為東京駅に到着された際、同窓生が出迎えたことを昨日のように思い出します。　中14回　大庭定雄

●法要を営まれますことに感慨無量です。　中15回　鈴木鋭彦

●尾崎先生の教えが私の人生の樹になっています。見付中学に入校した事を誇りに思っています。母校の益々の発展を祈念して止みません。　中15回　後藤一二

●尾崎校長先生の御教訓を胸に今も頑張って居ります。　中15回　大庭恂一

●兄の相場長衛、相場敏郎（故人となりました）が先生にお世話になりました。見性寺では、演劇部当時合宿でお世話になり、泉のある池や当時の住職さんを思い出します。気持ちだけですが。　高2回　日比野誓五

●見中2回卒故内藤俊一と見中10回卒故寺田謙三が尾崎先生にはお世話になったそうです。私の家（現磐田市笠梅）には先生が良く遊びに来られたと叔母から聞いております。御法要が盛会であることをお祈り申し上げます。　高10回　内藤俊彦

●中4回生の父の堀内貞雄と私の気持です。　高22回　大羽よしえ

尾崎先生と同窓生に感謝

発起人副代表・同窓会長
高11回　大橋　忍

初代校長尾崎楠馬先生の50回忌法要が、本年2月2日、大変寒い中にもかかわらず、大勢の方々のご出席をいただき営まれました。そして、多くの同窓生より心温まるご芳志をお寄せいただきましたことをご報告し、心より感謝申し上げます。また、この法要を計画・お世話していただきました発起人・世話人の方々にも、重ねてお礼申し上げます。

一昨年の春頃、見中19回生の佐藤清司さんが尾崎先生の思い出話をされました。その時私は、高21回生が総会担当年次の平成2年夏に作成したビデオ「ドカ中賛歌・尾崎楠馬物語」を紹介しました。

暮れに、佐藤先輩はこのビデオを見て、その最後に「昭和29年2月5日未明尾崎楠馬先生逝去・享年77才の生涯」と記録されているが、再来年は50回忌に当たるのではないかと連絡をくれました。

そして、年が明けてから、同窓生有志で法要を行いたいので、同窓会としても是非ご協力をお願いしたい旨の申し出がありました。

早速、同窓会役員会で検討し、協力することを決めました。見中卒業の方々を中心に発起人を選出。そして、世話人会を立ち上げ、昨年秋からご芳志の受けつけも開始しました。世話人の方々は、10回程の打ち合わせ会をもち、資料の収集、当日の準備など、熱く取り組んでくれました。続いて、特別号の発行にもご協力をいただきました。

校訓「質実剛健・真剣至誠・文武両道」は、今も私達の支えであります。真の人間教育を目指す建学の精神は、今日まで脈々と受け継がれ、歴史と伝統を刻んでおります。

尾崎楠馬先生50回忌法要実行委員

発起人代表　中3回　山内克巳
副代表　中4回　石川博敏
副代表　高11回　大橋　忍（同窓会長）
世話人代表　中1～20回　評議員　中19回　佐藤清司

同日校友会長嘉納治五郎先生より表彰される
東京高等師範学校在学中より卒業後に至るまで特に知遇を辱くしたのは、桜井寅之助先生、吉田弥平先生
4月5日茨城県立土浦中学校教諭を拝命同日舎監兼務を命ぜられる
明治41年（31歳）
7月25日同僚大峡秀栄氏の勧めにより日暮里両忘菴に入門、釈宗活禅師に参禅、7月29日少林の道号を授与される
明治44年（34歳）
4月15日母郷里にて病没、享年56歳
土浦中学校在職中、先輩遺沢恒猪氏の知己を得、後年見付中学校創立に際し職員組織について大いに尽力を受ける。また、大峡秀栄、北吟吉、小田原勇の盟友を得る。なおこの間、従弟船本昇、同晋を引き取り、東京高等工業学校に入学させる
7月31日青山師範学校教諭に任ぜられる
大正2年（36歳）
10月5日第一高等学校教授にして同郷の須藤伝次郎氏夫妻の媒酌により、旧鳥取藩出身亡宮川達夫長女芳と結婚
大正6年（40歳）
3月31日浜松師範学校教諭に任ぜられる。（当時同校の校長津久井徳次郎氏は青山師範在職時の舎監長）
大正10年（44歳）
3月31日釈宗活禅師より大事了畢により印可を受ける。入門以来14年
大正11年（45歳）
2月20日静岡県立見付中学校長兼静岡県立見付中学校教諭に補せられる
3月28日釈宗活禅師より胡盧菴の菴号並びに絡子を面授される
大正12年（46歳）
9月24日郷里にて父病没、享年75歳
大正15年（49歳）
11月6日見付中学校開校式を挙行する
昭和3年（51歳）
3月10日住宅建築のため柴田善三郎氏より見付町字北野（磐田市地脇町）に畑を買う
8月22日見付住宅組合に入り、見付町南小路の住居より新築の北野の家に移る
昭和11年（59歳）
5月11日叙勲5等授瑞宝章
昭和17年（65歳）
2月1日大政翼賛会磐田郡支部協力会議員を委嘱される
3月31日願により本職並びに兼職を免ぜられる。見付中学校創設以来在職20年、芸陽高等小学校訓導拝命以来満42年にて教職を了わる
4月13日県知事より教育功労者特別表彰を受ける
昭和18年（66歳）
10月9日見付中学校図書館前において、頌徳碑の除幕式挙行される

純粋なきれいな方でした。

中2回　浅羽芳郎

尾崎楠馬先生ご夫妻
結婚２５年記念写真
（高6回大竹萬さん寄贈、校長室蔵）

述懐　父とよばれ母とよばるることもなくてさびしかりけりやすけかりけり

私は浜松師範学校在学中の18歳の夏、最愛の母を失いその深い悲しみを32頁に綴って尾崎先生に送り、心のこもった慰めのお言葉を頂いた。又、妻や子供と先生を訪問して高知の大蟹を頂いた思い出。先生没後、奥様を見舞ったその日の朝、同級の堀内君が自分で作った野菜を沢山玄関にほうり込んでくれたと奥さんが話してくれた。先生は20年間見中同一校に勤め、死後その全財産を見付中学に寄付された。

先生はすべての生徒を愛して、卒業後もその動向を知悉されていた。

私に対しても「関君は母の研究に於いては全国にも稀な存在である」とほめてくれた。私はこの一言に励まされて、7冊の母に関する本を出版し、94歳（9月現在）の今も毎日数時間の勉強をして、今8冊目を執筆中。図書館から毎月20冊の単行本を借りて全部読破。

この情熱の継続が、私達の培われた「見中魂」のガンバリズムである。

絶えることのない香華

世話人　高14回　橋本洋子

1、清水豊翠さん

尾崎先生のお墓は、いつ行っても新しい生花が絶えることがありません。住職に訊ねたところ「名乗らないでしょうね」と。（同窓会だより19号「随所作主」参照）

それから数年、ずっとどのようなご縁の方かと思っておりましたので、50回忌を機会に再度訊ねたところ、重い口を開いて「天王町にお住まいの書家・清水豊翠さんです」と教えてくれました。

1月20日、同窓会長はじめ7人が見性寺の庫裏をお借りし、清水さんに初めてお目にかかりました。

豊翠さんの祖父、清水福三郎さんは、旧見付町の助役をされており、その時尾崎先生が見付中学に赴任され、先生に天王町の仮住居をお世話しました。その後、先生は永住の地と定めた地脇町に住居を構えましたが、引き続き清水家と深いお付合いをされたそうです。

豊翠さんは、子供心に立派な先生だと尊敬の念を抱き、毎朝登校時に先生と擦れ違った時お辞儀をすると、先生もソフト帽子をとって会釈してくれたことを、今でも懐かしく思い出すとのこと。

先生亡き後、奥様の芳さんとも親交厚く、その奥様も昭和51年に亡くなられたため、跡継ぎのおられない先生ご夫妻のお墓を守って下さっていると伺い、一同大変感動いたしました。

また、孫達を伴い見性寺へ墓参し、尾崎先生のことを話されるそうです。

5代に渡って尾崎家をお世話してくださっている清水家の方々に、法要の席で感謝の意を表しました。

2、松桜会

松桜会は、毎年7月の第1土曜日に代表者が見性寺に集まり、住職の読経と卒塔婆を供えられております。

松桜会は、「将来我が国の教育を双肩に背負って立とう…」と、見付中学から浜松師範及び静岡師範に進んだ同窓生によって、昭和5年3月、先生を会長として結成された会である。

（尾崎楠馬先生遺稿集より）

編集の過程で、清水豊翠さんの孫が鈴木悠里さん（次頁）だと判りました。

（上）見性寺の松山住職の読経に合わせ合掌・焼香

（右）尾崎先生の奥様没後２６年有余の間、毎月香華を供えて下さった清水豊翠さんに感謝の品（高１３回寺澤彰紘さん作の吹きガラス花瓶）を贈呈

恩師尾崎楠馬先生

中1回　関　吉太郎

私は見付中学で、尾崎楠馬先生と、小田原勇教頭の両先生の薫陶を受けた事を本当に有難く思っている。

両先生は稀世の傑出した教育者で、見付中学を死に場所と定めて、学校愛・生徒愛に燃えて渾身情熱を傾注。

人格皎潔、識見高邁土佐ッポの尾崎校長と、古武士の気概ある薩摩隼人の小田原教頭と堅く組んだ刎頸の交わりから発する魅力的な教育方針。質実剛健の校風樹立、労作教育の慣行。

私たちのクラスから、東大や国立大学や専門学校に多数合格出来たのも、労作教育によって培われた卓抜な精神教育の賜である。

モッコの土運び、土堀り、この過重労働に堪え、顔の写るまで廊下を磨き、人にわからないように夜中の暗い中に教室を掃除する陰徳は他校生のまねの出来ないもの。

見中魂健在！

先生を偲び熱っぽく語る

尾崎校長を偲んで

- 1回生の思い出　中1回　関　吉太郎
- 労作教育と人間教育　中4回　石川　博敏
- 生徒・教師から見た尾崎校長像　中5回　友田　好
- 尾崎教育振興基金の活動状況　高1回　加藤喜一郎
  学校後援会理事長
- 土佐の生地を訪ねて　高14回　橋本　洋子
- 建学の精神の現状　学校長　内山　賢二

副代表　中20回　柏原博一
世話人　高17回　桜井孝順（同窓会副会長）、高14回　橋本迪子、橋本洋子、高21回　木野省三、（以上３名高知訪問者）高23回　三宅良介（校内幹事）

尾崎楠馬先生50回忌を終えて

世話人代表　中19回　佐藤清司

1、発起人・世話人会立ち上げまで

平成13年暮れ、磐南高在学中の二人の孫達に「ドカ中賛歌・尾崎楠馬物語」のビデオを見せていた私は、尾崎校長の50回忌に気づき、先生の葬儀が同窓会葬として講堂で行われた日の記憶が微かに甦りました。

先生の薫陶を直接受けた同窓生は、現在約１２００名が生存。自分が手を挙げるべきか数日考えた末、山内克巳先輩を訪ねました。「もう、そんなになるかなあ。入院した時、中泉駅（現磐田駅）まで見送りに行ったのが、昨日のことのような気がする。同窓会に相談したほうがいいよ」との賛同をえましたので、その足で石川博敏先輩の事務所へ。「気がつかなかったなあ。同級生が積み立てた金があるから、それを使ってもいいよ」と快諾をいただきました。

そこで、同窓会長に支援をお願いし、14年度総会で了承されましたので、同窓生有志で法要実行委員会を立ち上げ、同窓会だより24号に法要のお知らせを載せてもらいました。

2、感謝と激励のことば続々と

「尾崎先生のご冥福を心からお祈りします。今回の法要の計画嬉しく思います」他たくさんのコメントをいただきました。その中で、中17回の岡本先輩の「尾崎先生には格別に可愛がっていただきましたので些少ですが仲間にいれていただきます。ただ、組織が何も知らされていませんので（老婆心ながら）振込みを躊躇される方があるのでは…と、心配いたしております。云々」は、私の危惧していたところをズバリ指摘され、正直なところ一時挫折感を覚えました。

たしかに、あのお知らせを見るかぎり、個人の呼びかけと解釈される

この特別号発行直前に尾崎先生の述懐の和歌とご夫婦の写真が寄贈されました。

昭和19年（67歳）
2月24日静岡少年保護協会より磐田少年保護相談所長（初代）を委嘱される
3月21日3歳より養育の恩を受けた叔父船本楠吉郷里にて病没、享年86歳
昭和21年（69歳）
6月13日司法省より司法保護委員を命ぜられる
12月8日叔母船本たけ病没、享年78歳
昭和22年（70歳）
3月1日静岡県郡社会教育委員を委嘱される
10月12日卒業生有志、見付中学校において古希祝賀会を開催
11月3日多年司法保護委員として成績優秀のため、静岡司法保護委員会長より感謝状を受ける
昭和23年（71歳）
4月1日法務総裁より静岡少年審判所調査員（少年保護司）を命ぜられる
7月22日磐田市社会教育委員会委員を委嘱される
昭和26年（74歳）
7月磐田市誌編纂委員会顧問を委嘱される
昭和28年（76歳）
6月下旬、胃に変調を感じ、7月2日青島猪太郎医師の診察を受け、一時小康を得るも9月に入って羸痩（るいそう）日に加わる
11月5日小田原勇氏と東大医学部講師大津正一氏と偶然相会し、東大木本外科松下良司氏招聘のことを談合
11月8日松下良司氏来診、同窓会幹部と相談の結果、東大にて治療に決する
11月16日青島・鈴木両医師、匂阪勝蔵氏及び川島正平氏に妻芳付き添い、雨中磐田駅発、夜に入り東大付属病院木本外科1号室に入院
11月25日木本教授、松下良司氏、ほか2医師の執刀により胃の手術了わる
昭和29年（77歳）
2月4日諸方に危篤の急報を出し、多数の卒業生等に囲まれて夜に入り最後の挨拶をなし、12時静かに眠りに入る
2月5日午前4時25分、静かに息絶ゆ。7時、大津正一氏執刀にて解剖。この夜霊安室にて通夜、酒井得元師読経
2月6日火葬
2月7日遺骨は妻芳捧持し、弟三郎及び磐田南高同窓生に護られて帰宅
2月21日磐田南高等学校講堂において同窓会葬挙行、戒名は普照院嵩嶽少林居士
3月11日（35日法要の日）27年1月自ら選定しおきたる磐田市見付見性寺の墓地に埋葬
8月5日建碑。墓誌銘は磐田南高等学校長木原美義氏、書は受業鈴木未央氏

昭和60年7月尾崎教育振興基金設立
没後30年を機に、遺族の尾崎道子さんから、尾崎邸跡地の寄贈があり設立。
この売却代金と同窓会募金、その他の寄付金合わせて4638万円（昭和62年末現在）を原資とする。その後、卒業生保護者や70周年事業などからの寄付金により増額。基金より生ずる利息を活用し、生徒・教職員の研究、顕著な業績、母校における教育の質的充実発展に奨学援助を行っている

尾崎先生と私、そして家族

高48回　鈴木悠里

私は1995年3月姉妹校MV高校を訪問し、異文化やさまざまな人と出会い、貴重な体験をしました。その際には、訪問費の一部を尾崎教育振興基金から助成していただきました。

初代校長である尾崎楠馬先生は、とても素晴らしい人柄で名物校長先生だったことや、赴任された折には曾々祖父と交際があったこと、祖母の兄（見中15回生）が戦死したときに弔辞を詠んでいただいたことなどを、祖母から聞いていました。そのような経緯があり、磐南への入学・卒業の際やMV高校訪問の折、帰省のときには、尾崎先生のお墓参りを家族と共にするようになりました。私自身、尾崎先生とお会いしたことはありませんが、MV高校への訪問の機会や、同窓会だよりを読む中で、尾崎先生のことを少しずつ知るようになりました。

このような尾崎先生を筆頭に創立以来、諸先生・諸先輩方が築いてこられた磐南という一つの場で得た人と時との出会いは、大変充実したもので今の自分につながっています。それは、過ごした三年間の高校生活で実際に経験したことを越えるものだと感じています。

私にとって尾崎先生や磐南は、素晴らしい環境でさまざまなものを得た高校生活でした。この体験を生かし、未来に向って今やその時その時を大切に歩んでいかなければならないと思う人生の出会いでした。

最前列右から2人目が鈴木悠里さん

高知・心の旅をしませんか

世話人　高14回　橋本迪子

尾崎先生は、中2回卒、高田忠一氏あての書簡の中で次のように高知を自慢しておられます。

「…よく高知を訪ねて下さった。播磨屋橋も帯屋町も思い出の橋であり町であり、焼け残った天守閣は土佐人に取っては追憶の的であり誇りでもある。若し若干の暇があったら、せめては月の名所の桂浜に大町桂月を偲び、雄大な坂本龍馬の銅像と其の背景となり前景となっておる自然の景象を十二分に観賞して貰いたかった。更に豪宕な室戸岬、神秘を極めた龍河洞の鐘乳窟を探って下さったらと、数え立てれば未練は数々御座る。…」（昭和25年11月10日付）

また、先生は五千首句にも及ぶ漢詩、和歌、俳句を詠まれました。

子を持たぬ我にしあれば逝きましし　父母のみぞ恋しかりける

草餅や　母の石碑も　苔むしぬ

と、郷里の父母を慕う気持ちに心が痛みます。さらに、先生は近隣の校歌を沢山作詩され、晩年の作である新居中学校の校歌には「…海上はるか朝日はのぼる おおらかに心もたなん…」と詠っています。先生が青春時代、水泳にボートにと活躍された桜浜、手結の港等、雄大な高知の海と山とに重なります。

磐田の地に全生涯を捧げて下さった先生に代わって先生とご縁のある方々に出会い、高知の風土を満喫しませんか。

高知旅行のお知らせ

決定 日程　平成16年4月10日（土）～4月12日（月）

（案）磐田 6:52 ― 浜松 7:12 ― 名古屋 8:03 ― 新大阪 8:58 ― 岡山 9:52 ― 後免 12:33 ― 赤野 13:10　片道運賃 17,000円位

羽田空港 10:10 ✈ 高知空港 11:25着（タクシーで10分 1,000円位）野市 12:42 ― 赤野 13:10　片道運賃 24,000円位

途中・現地合流、部分参加も歓迎。参加希望者には人数を把握次第詳細をお知らせ致します。
問い合わせ、参加希望は、12月末日までに下記へはがきでお申し込み下さい。
〒438-0086 磐田市見付3084　磐田南高校、校内幹事　伊藤修二 まで

尾崎文庫に光を！

世話人副代表　中20回　柏原博一

母校の図書室の一角に、「尾崎文庫」があります。尾崎先生の蔵書をはじめ、開校当時の貴重な資料がたくさんありますが、古く傷ついた書棚に埃をかぶり、無造作に置かれています。

高34回生の駒形一路先生は、近頃それらの整理を手がけ、授業に活用し後輩生徒達に尾崎先生の偉業を伝えております。

『大字典』の御審査用見本を手にする駒形一路先生

尾崎文庫には、昭和初期の新版『大字典』の御審査用見本が収められています。その啓成社『大字典』の跋（あとがき）には、編著者の榮田猛猪（たけい）氏（尾崎先生とは高知師範同期卒業の盟友）の述懐として、その10有余年の過程が詳しく載っています。

「…余が終日筆を握り、気餒ゑ胸痛み、憂鬱遣るに由なき時、忽ち来りて詩を吟じ、思を攄べ、以て余を慰め、余を労りしは、余が二十年来の心友尾崎楠馬君…」（『大字典』跋より）

「心友」に敬意を表して、世に出る前に贈られたものであろうと推察されます。

預かっているダンボール箱から母校の歴史をひもとく数々の書簡等が見つかった

ような記事でしたので、同じように受け取った方がいたのではないかと反省いたしました。

早速、今までの経過と組織等々詳細に返事を差し上げました。折り返し「同窓会だより」の記事が極めて簡単でしたので、尾崎先生の法要が円滑に推進されることを希う一人として、心配しました。「云々」と温かいご返事をいただきました。

3、国際交流 MV高校訪問に思う

学校後援会活動の一環として、磐田市の姉妹都市アメリカのマウンテンビュー市の高校との相互訪問交流が行われておりますが、今年で10周年を迎えました。

平成5年に第1回訪問団が、そして本年は6回目を予定しておりましたが、緊迫した世界情勢を憂慮して中止となりました。過去5回計150名の生徒と同行の教職員・後援会役員がMV高校を訪問しております。

これらの訪問旅費等の一部を尾崎教育振興基金から助成しておりますので、学校後援会理事（当時）の一人として、この基金の設立・目的等を十分理解して参加しているのだろうかと、非常に関心を持っておりました。

同窓会だよりには、訪問した生徒がその成果だけを報告しておりますが、その交流の原点を語っていないのが淋しく感じられました。その大勢の中でたった一人若い鈴木悠里さんのコメント「マウンテンビュー訪問ではお世話になりました」にはどれだけ励まされたか、山内発起人代表が法要の挨拶の中で披露しておりましたし、磐南高校新聞でも学校長が取り上げております。

4、284名有余からご芳志

中1回～高49までの284個人と、中17回・高11回生一同および関東・磐田支部から約98万円のご芳志が寄せられました。

法要費用、墓石のクリーニング、特別号発行などに使わせていただきました。残金は、遺品の整理保管などに当てたいと思います。

はぐま楽書会（高3回飯田弘治代表）は、尾崎楠馬先生が詠まれた和歌や漢詩を題材にした書作展を、平成16年2月下旬、磐田市福祉センターにて予定しています。